

「あれっ」と思ったら

産婦人科にかかるときは、なかなか勇気がいりますが、それでも「あれっ」と思って受診するきっかけの一つに、女性の異常出血があります。

私たち産婦人科医は異常出血の方々を診療するうちに、経験上感覚的に「多いな」とか「希だな」とか、症状や疾病ごとにおおむねの印象をもっています。しかし、それを客観的に数値化した医学報告は少ないのです。そこで、日本産科婦人科学会では群馬大学の岩瀬教授を中心に異常出血の症状や原因に対して、全国規模の調査を行ってきました。これをもとに群馬大学産科婦人科学講師の北原慈和先生が、プライバシーに配慮した手続きを踏んで、約8000名もの異常出血の患者さんの症状を調べた貴重な報告を御紹介します。

異常出血の中で、子宮からの出血を異常子宮出血(AUB)といいます。診療の結果判明した原因のうち、腫瘍など形に異常のある原因をPALM(パーム)と呼び、形に異常ないものをCOEIN(コイン)と呼びます。各々、さらに詳しく分けていきます。例えばAUB-LはPALMのうちのL、子宮筋腫を表す、といった感じです。この分類を使って、8000件の症状とその原因を分類したところ、異常子宮出血のうち、最も多かった原因は卵巣機能の不調で約38%でした、罹患率の高い子宮筋腫は約14%、気になる悪性腫瘍及び前癌病変は3.4%でした。一方でどれにも分類されない(希な原因または原因不明)が17%ありました。さらに、閉経前女性の異常出血の様子を詳しく聞き取ることで、症状に対応する原因疾患に傾向があることが判ってきました。月経血の少ないときは卵巣機能の不調が多く、その背後にホルモン分泌異常の病気が見いだされることがあります。一方で月経血が多すぎる症状の場合は、子宮腺筋症、悪性病変と関連する傾向があり、長すぎる月経の場合は悪性病変、ポリープと関連する傾向がありました。また、年齢別にみると、20代から40代まで、形のうえで異常のある原因の割合は加齢とともに高くなっていきます。

以上のように、医師にとっても患者さんにとっても明日から役に立つとても有意義な報告でした。

「あれっ」と思ったら、いつでもお気軽に受診してください。

原著: Kitahara Y J Obstet Gynecol Res . 2023 Jan;49(1):321-330. National survey of abnormal uterine bleeding according to the FIGO classification in Japan

【産婦人科診療部長 鏡 一成】

